
魔術師の機密

異崎翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師の機密

【Nコード】

N2284V

【作者名】

異崎翔

【あらすじ】

西暦三千十八年、第四次世界大戦終了後、この戦争において活躍した魔術師は『魔術師殲滅令』によって殲滅された。その魔術師の中に、一人の英雄がいた。名は紅克之。彼は天才だった。彼のおかげで日本は敗戦国とならなくてすんだのだが、そんな彼も死。——これは彼の息子が父の死因や魔術師殲滅令、戦争目的などの真実を求めてヒロインと旅をしたり戦ったりするお話。（主人公最強系です。チートではありませんのであしからず↑大丈夫な方、お読み下さい）

プロローグ（前書き）

この小説はフィクションです。

総理大臣とかいろいろ似たような名前が出てきますが、現実とは一切かわりありません。作者に専門知識はありませんので、いろいろスルーしていただくと幸いです。

これは今から千年後のフィクション。

プロローグ

魔術師。

それは今となつては数少ない。

西暦三千十八年。第四次世界大戦と称されたリシフェリア大国との戦争により活躍した彼ら魔術師は、戦争終了後、日本国現総理大臣、ふじさきしげみつ藤崎重光の命によって殺された。天皇陛下もそれを知ってか知らずか、魔術師殲滅令が出た数日後、表に姿を見せなくなった。

魔術師殲滅令。それは魔術師を見つけたら殲滅する、という単純明快な命令。その命令が発令されてから魔術師は外に出ることを恐れた。

今では一般人も銃器を扱うことを許された時代。いくら魔術師でも、心臓を銃弾で打ち抜かれては生きていられない。

その魔術師のなかに、一人の英雄がいた。

名はくれなゐつゆき紅克之。彼は第四次世界大戦で魔術師の中心となり命令を下していた。魔術師からの信頼もあつい人物。彼は、天才だった。

彼の戦法により、リシフェリア大国と『引き分け』という結果に終わった。きっと彼が魔術師の中心となり行動を起こさなければ、この第四次世界大戦は敗戦という結果に幕を閉じていたであろう。

紅克之。

彼には家族がいた。

愛する妻と、愛する息子。

妻は魔力を持たないただの一般人。一般人との間に生まれた子とはいえ、克之の血を受け継いでいるのなら魔術に優れた人物が生まれてくるだろう。周囲の期待は高かった。

しかし生まれたのは母親の血を濃く受け継いだ赤子。魔術は使えども、父のような優れた能力を持ち合わせてはいなかった。

そのことから、彼は世間から落ちこぼれと言われ、白い眼で見られてきた。魔術師の期待を裏切った人間として。

魔術師は、人間とは呼ばれない。

魔術師は魔術師。他の何者でもないのだ。そのため一般の魔術の使えない人々から一瞥される。

魔術師から人間と呼ばれた彼は、魔術師として認められないのだ。そのため、魔術師たちにも、人間達にも彼の居場所はなかった。

彼が生まれて一年。まだ物心がつく前に彼の母は原因不明の病にかかり病死。男手一つで18まで育て上げられた彼は、父のような魔術師になるため、日々の努力を欠かさなかった。そして、第四次世界大戦が幕を開けた。

父、克之は彼に背を向け、戦線に赴いた。それから一月後、克之は戦死したとの報告を受けた。

父が死んだ。

それは彼にとって受け入れられないことだった。天才。

父はずっとそう呼ばれて過ごしてきた。自分を受け入れてくれたたった一人の魔術師。

彼は父を尊敬していたし、周囲も彼を信頼していた。そんな父が、死んだのだ――。



朝日とともに眼が覚めると彼はすぐさましたくを始めた。漆黒の髪と瞳。寝癖のついたその黒髪を左手でワシヤワシヤとかき立て、洗面所にて顔を簡単に洗う。

すらっとした顔立ちに、180近い身長。彼は自分の顔を鏡で見て、両手で頬を二回、パンパンと強くはたく。

そして彼は古びた、微妙に背丈の合っていない茶色いコートをはおり、両手にグローブワイバーンをする。

腰に竜に翼の生えた飛竜の彫刻がされている剣を携え、有り金を全て一つの袋に詰め込んでから、18年間過ごした家を見渡す。

18年間、父とともに過ごした家。

自分の唯一の居場所だった家。

しかしそこには、もう父はいない。彼の目標だった人物はいないのだ。

そんな空き家となった家を見渡し、彼は小さく微笑む。

「父さん。行ってくるな」

彼は小さく一言呟いてから、その古びた家を背に歩みだした。

プロローグ（後書き）

この作品を読んただけで幸いです。

誤字、脱字、不適切な言語がありましたら、気軽にお知らせ下さい。

1 とある町で

家を出てから丸三日。

彼は大きな町にたどりついた。

たくさんの人間でにぎわう、大きな町。

戦争によつて被害にあつたのか、家は崩れ、修復活動をしている。

しかしそんな中でも元気に活動している、明るい町。

今は、とても平穩そうな――

「盗人ー！ 誰か捕まえて！」

女性の甲高い声が辺りに響いた。

見ると40くらいの女がピンク色の豪華そうな服を着て、しりもちをついて叫んでいた。彼女の目線の先にはボロボロになった服を身にまとつた、10歳いくかどうか位の、小汚い少年が豪華なバッグを大事そうに抱えて必死に走っている。

別に盗人がどうしようが彼には関係がないのだが、さすがにこつちに向かつて全力疾走されると困る。

彼は数秒盗人を見つめ、なにかひらめいたように指をパチンつと鳴らせた。

「俺頭良すぎだろ」

ナルシスト発言をしてから、全力疾走してくる少年が彼の脇を通り過ぎようとしたとき、ヒョイっと少年に足をかける。

もちろんギリギリのタイミングで出された足を少年がよければず

もなくて。

ズドオオーっと大きな音を立てて少年は豪快に転倒した。

そして彼は盗人の大事そうに抱えているバッグを取り上げ、しりもちついている女に

「どうぞ」

と、今自分にできる最高の笑み（引きつっているが）を浮かべ、女にわたす。すると女はほっと胸をなでおろした。

「ありがとうございます。何かお礼がしたいのだけれど」

そんな女の言葉に待つてましたといわんばかりの勢いで彼は

「もしよろしければなのですが、格安の宿を紹介していただければ」

と、言った。



少し古いが、丁寧に掃除をされている木部屋。

そこはベッドとテーブル、イスしかない殺風景な部屋で、少しさび付いている小さな窓から差し込んでくる日の光がベッドに降り注いでいる。

その白いベッドの上に彼は腰を下ろして、辺りを見回した。

「まあ、戦争の後だし、格安つつたらこんなもんか。朝食ついてる分感謝しなきゃな」

一人呟き、先程この宿を教えてくれた中年女性に感謝する。

そして三日歩き続けた疲れを癒すように、すぐに眠りについた。



夜中。

ほぼ十二時ちょうどといっても良いくらいの時間帯に、夜をかける怪しい人物が彼に近づく。

薄紅色のストレートな腰まである長髪を邪魔にならないように一つに縛った、華奢な体躯の15、6歳位の女性。

暗闇だと言うのに彼女の燃えるように赤い瞳はキラキラと輝いて見える。

彼女は慣れた手つきでさび付いた窓を開けると、さつと音を立てないように彼に忍び寄った。

（この男が金を持っていそうな旅人？そんなふうには見えないけど……）

彼女はそんなことを思いながらも、無防備に規則正しい寝息を立てている男に眼を向ける。

暗闇とはいえ、彼女は眼が良い。そして暗闇に慣れている。

そのため、大雑把には周りの状況を把握することができる。

すらっと整った顔立ちに、漆黒の寝癖のついた髪。長身ではあるが、あまり強そうには見えない。こんな男が本当に遠くから旅をしてき

たのだろうか。

今はどこもかしこも戦争によって町が閉じている。被害を受けた町はなおさら。

この町は少なからず被害を受けているので、そう簡単には入れなかったはずだ。そのことを考えると、彼はどこぞの坊ちゃんか、ある程度の実力者。

「まあ……前者の確立が高いかな」

彼女は小さな声で呟く。

どうせ被害の受けた、危なくない程度の町の見物にでもきたというところだろう。

彼女はもう一度、無防備に寝息をたてている男を見つめる。

「なに？俺に惚れた？」

「！？」

不意に、男の方から声が発せられた。

そして今の現状に彼女は目を見開いた。

先程まで規則正しい寝息を立てて熟睡していたはずの男が、いつの間にか自分の背後にいたのだ。

そのうえ彼の手には剣が握られていて、その剣先が彼女の首元に添えられている。

「で。俺に惚れた？」

繰り返し聞いてくる男に、そんなわけないでしょう、と喉まで声が出かかって彼女は無理やり飲み込んだ。

そして彼女は視線をできる限り男のいる、背後へと移動させる。
脱力しきった状態で彼は剣を左手に持っている。

彼の構えは達人プロの構えじゃない。いくら相手の動きが早かろうとも、それなりに実践を経験してきた自分にも勝算はある、と彼女は考えた。

そのまま懐に入っている拳銃を取り出そうとすると……

「無駄。俺にそんな銃はきかない。持ってくるんならバズーカ砲かマシンガンくらい持って来いよ」

なんて、彼はこちらの心を見透かしたように話し出す。懐に入っているものが拳銃だとわかりきったような口調で彼は言う。

それに彼女は、冷汗が頬をつたるのを感じた。

この男は後者の実力者だと、彼女は今更ながらに確信した。お気楽そうな口調をしていても、どこか抜け目がない。スキがありそうで全くないのだ。

「あんた、何者？」

「あ、俺の名前を聞くとは……。やっぱり俺に惚れたな」

「……………」

「なんだよその哀れみの目はっ。ってか、人に名前を聞くんだったら自分から言え」

彼はお気楽な口調で続ける。

こちらはいっ殺されるかとひやひやしているというのに。

「私は……………いつつきるな抗月瑠奈。あんたは？」

「へー、抗月瑠奈か。で、なんでお前は俺を狙ってる？まあ大体予想はつくけど」

「名乗りなさいよ」

「あー、悪い。俺は紅勇斗^{くれないゆうと}」

紅……どこかで聞いたことがある気がするのはなぜだろうか。

そのとき、すつと剣先が瑠奈の首筋から外れた。

剣は紅勇斗と名乗った男の腰の鞘に納められ、飛竜^{フイバーン}の彫刻が暗闇だ
というのにギラリと光った。

2 目的

彼は剣をおさめると、そのままゴロリとベッドに寝転んだ。それから何をするかと気構えていたら、スースーと穏やかな寝息を立て始めたではないか。

「……………あんたねえ……………」

そんな彼女の呟きも当然のように無視される。

彼女はそんな紅勇斗を見つめ、考える。

彼女はこの旅人の金銀財宝を盗みに来た。なのに散々コケにされたあげく手ぶらで帰るなんて彼女のプライドが許さない。別に盗人が本職ではないのだが。

「適当に金もらって帰れば良いか」

彼女はそんなことを小声で言うと、部屋を見回した。

特に金目のものは置いていない、とすれば紅勇斗が身につけている。

彼女はこそそそと勇斗に近づき、懐を探ろうと手を伸ばした。が。パシッ

小さな音を立てて、彼女の白く細い手首がつかまれた。

「人の寝込み襲うとか良い趣味してんじゃない。そんなに俺と寝たいわけ？」

「全力で断るわ。それより金をよこしなさい」

「…………面と向かって言うのもどうかと思うが。それに俺は金なんて持ってないぞ？ここの家賃も払わずに逃走するつもりだし」

そついうと、彼女はベッドから身を引き、盛大なため息をついた。

「使えない男ね」

「…………人のものを盗もうとしておいて何をいうか。それに、その瞳の色は隠したほうがいいぞ」

「!？」

瞳。

それは人種を区別するために残された最後の特徴。

今では遺伝的に黒髪以外の色が日本人に生えてくるのは別に珍しくはない。

しかし瞳は別だ。

個人差はあれど、その国の特徴的な色がある。

日本はもちろん黒。今では茶色や少し明るい色の混じった人も多いが、基本的黒い面影がある。

それに対し、第四次世界大戦の日本と闘った敵国、ルシフェリア大
国は赤。いや、紅色と言うところだろうか。

彼女の瞳は燃えるような赤。

しかしこの国に来てカラーコンタクトをつけていたのだ。まだばれた事は無かった。

この男は、暗闇の中一瞬瑠奈の瞳を見ただけで、彼女の人種を見破ったというのだろうか。

いや、見えるはずが無い。

月明かりも少ない暗い部屋の中で、どうやって相手の瞳の色を完璧に見ることができのだろうか。今では赤褐色の日本人もいるくらい

だ。

見分けられるはずが――。

しかし、そこで勇斗は彼女の思考をさえぎる。

「……で。何でルシフェリア人が日本、しかも戦争の被害を受けたこの町にいる？」

――ばれてる。

完全に奴は瑠奈の人種を見極めている。

勇斗の鋭い視線が瑠奈の燃えるような赤い瞳を貫いた。

彼女は止むを得ないと、懐に入っている愛用の拳銃を、常人とは考えられない速さで抜き、

――ダアンツッ！

撃った。



シューーっと、抗月瑠奈のもつ拳銃の銃口から煙があがる。小さな部屋一室に、この煙の臭いがまわるのは早かった。

彼女は、発砲したのだ。ためらいを見せず、俊敏に。

彼女が発砲した先には、勇斗がベッドに寝転がった状態で剣を頭の前に構えていた。その剣の腹ど真ん中に、三発の弾丸が食い込んでいる。

彼は剣をおろし、ヒュウっと短く口笛を吹いた。

「あつぶねー。普通人の脳天めがけて発砲するか？ しかも一瞬で三発撃つとか……。ルシフェリア人は皆こんななのかよ」

「……………訓練を受けていれば結構できると思うけど。ってか、せっかく弾使ったのに受け止めないでよ。もったいないじゃない」

「そう思うんなら撃つな。弾の無駄だ」

彼はそんなふうに余裕こいた発言をしているが、痙攣した手のひらを見て驚いていた。

普通だったら余裕ではじき返せるはずなのに、瑠奈の撃った弾丸ははじき返せなかった。狙いが正確だったゆえに、剣に食い込んで来

ただ。

その上、手が痙攣している。

相当威力の高い拳銃なのだろう。

今ならまともにやりやつても負ける気はしないが、そのうち彼女が鍛錬を積み、努力してきたのであれば、危ういかもしれない。と、彼は考える。

そしてこの年になるまでにここまで正確に銃を扱えるとなると、どこかで相当な訓練を受けてきたのだと考えられる。

この女は、ただの女じゃない。

勇斗には確信ができた。

「お前出身地はどこだ？」

「は？何であんたに教えなくちゃいけないのよ？」

「別に言いたくないんなら良い」

「……………」

そっけなく返事をして、勇斗はベッドからみを起こすと、ベッドに腰をかける体制になった。

「別に教えなくても良いんだが、どうせ今のお前では俺には勝てないから金はおきらめてくれ」

「……………一つ、いや、二つ聞きたいのだけれど、いい？」

「なんだ？」

彼女は燃えるように赤い瞳で真直ぐとこちらを見据え、聞いた。

「まず一つ。なぜあんたは旅をしてるの？目的を教えて。次にあんたは何者なのか、この二つが聞きたいわ」

「答える義務は無い」

「じゃあ、どこへ向かっているの？」

「……………真理、いや、真実かな」

勇斗は窓の隙間から見えるはるか遠くを見据え、呟いた。

彼の目的は三つ。

一つ目は父親の存在確認。

二つ目は魔術師を探すこと。いや、見つけること。

最後に今の日本の状況確認。今までの歴史を把握し、現状を把握する。なぜ総理は第四次世界大戦にて必要不可欠だった魔術師を殲滅するなどと言う命令を下したのか。

いや、これらの目的は通過点にすぎない。

彼の本当の目的は――。

3 図書館

朝。目が覚めると昨夜に盗人が入ってきたには、どこも荒らされた形跡はなかった。

紅勇斗は適当に顔を洗って、背丈の合っていない、茶色いロングコートを羽織る。そして若者にしてはゴツゴツした彼の両手に、グローブをはめ、この宿屋の受付に下りた。

受付。

そこはやはり部屋と同じく古びたところ。

しかし細かく隅々まで掃除してあるため、埃一つない。

そんな部屋の机に頬杖つきながら小汚い新聞を読んでいる髭の生えた中年の男性。この男性が宿屋のオーナーだ。

「よう、おっさん」

「ん？……ああ、お客さん。よく眠れたかい？」

「ああ。おかげさまで」

「それは良かった」

ぶつちやけると夜中に人の気配で起こされて睡眠時間が少し減っていたのだが、オーナーのせいでもないと言わないでおく。それよりも彼が言いたいことはこんなことではない。

「あのさあ……」

彼は黒いクセのついた髪をグローブの上からクシャクシャとかき立て、聞いた。



きれいな町並み。

一回狙撃を受けただけとはいえ、戦争の被害にあった町だ。それなりに汚い……というか、崩壊していることを覚悟できたのだが、普通に人が暮らしている。

ここには昨夜泊まった宿屋のような古びた場所ではなく、戦争の被害なんかにはあわなかったような、知らなかったような洒落た建物がズラリと並んでいた。

ここだけ被害を受けなかったのだろうか。

しかしそんな考えはすぐに消えうせた。

建物と建物の間のジメジメとした日陰に横たわっている人間。

ボサボサした髪に、何日も洗っていないような泥のついたからだ。老若男女問わず、そこには今にも死にそうな人間達が建物に寄りかかっていた。

——表を歩く金持ち共がいれば、裏に這い蹲る惨めな人間もいるということだ。

彼はそんな人間達を冷たく横目で流し、前を見据える。

彼の目の前にはそれなりに大きな建物。

数箇所、戦争によって弾丸を打ち込まれた形跡は残っているものの、特に外傷はない。

屋根の丸い、大きなガラス扉のある建物。

彼はそこに足を踏み入れる。

扉を左手で開け、中に入る。

中にはズラッと、たくさんの本が並んでいた。
中央にイスや机が多数形よく置いてあり、数人の人間が読書をして
いる。

そう、彼が宿屋のオーナーに聞いたのは

『なあ、おっさん。この町に歴史とか最近あったこととかが詳しく
書いてある、資料館とか、図書館とかないか？』

ということ。

彼はここで、ありったけの情報を集める気なのだ。



夕暮れ。

時計の針は時刻六時丁度を指した。

『お客様。今日は閉店いたします。気をつけてお帰りくださいませ』
なんて言葉が図書館全体に響き渡った。

「……………」

彼は無言で今読んでいた本を閉じる。

時間ギリギリまで歴史や第四次世界大戦のことを調べたというのに、
何一つ情報が出てこなかった。

「ま。そんな簡単に見つかるわけねえか」
「何が見つからないの？」

不意に声をかけられ、反射的に後ろを向く。

と、そこには昨夜不法侵入してきた薄紅色の長髪を一つにまとめ、燃えるような赤い瞳をコンタクトで隠した女、抗月瑠奈が黄色いエプロンを着て、本を数冊抱えながら立っていた。

4 強さ

彼女、抗月瑠奈はコンタクトを使用しているために曇った赤い瞳を勇斗に向ける。

不意に声をかけられたために反射的に振り返った彼は、相手が瑠奈だったことに

「はあー」

ため息をついた。

「ちよつと、なんでため息ついてるのよ！ さも振り返って『見た相手が私で残念』みたいなオーラださないでよ！」

「……………じゃあ、俺帰るわ」

キーキーと騒ぐ瑠奈に対して、勇斗はさめた口調で踵を返した。
が、肩を思いつきりつかまれる。

勇斗は不機嫌丸出しの表情で瑠奈を見ると、勝ち誇ったように彼女は言った。

「私、この図書館結構詳しいんだけど？」

「……………だから？」

「私の正体誰にも言わないんだったらあんたの捜し求めている本を探すくらいできるわよ」

「ああー、それもいいな」

「でしょう？」

「だが、断る」

「なんでよ!？」

彼は冷たく瑠奈の手を払いのけると、そのまま図書館を出て行った。また、金のかかっている大通りをスタスタと前進し、宿屋に向かう。

もうすでに陽は暮れ始めていて、辺りはオレンジ色の空に染まっていた。

そんな中、先ほどまで路地裏のジメジメしていた空間で今にも死にそうだった奴らが、動き始める。

そろそろと歩いては勇斗の周りを囲むように男達は丸く群がった。

「……………」

彼は無言で歩き続けようとすると、それにあわせてボロボロの服を着た、今にも死にそうな青ざめた顔色の男達は重そうな足取りで勇斗の周りを歩く。皆十代から、五十代くらいまでの年齢だ。

その中に一人、とりわけ体躯の小さい男がいる。

ボサボサになった茶色い長髪に、小汚い顔。折れそうな体。そう、先日金持ちのバッグを盗もうとして獲物を勇斗に奪われた少年だ。

少年は、腐りかけの折れた棒を右手に持って、こちらを見据えていた。

その他の連中も棒切れや石など、そこらへんに落ちていそうなもの

を抱えている。

石だろうが棒だろうが、人間に当てればそれは凶器となる。

この少年達はそれをわかってでも、そうせざるをえない状況まで餓^うえているのだ。

そんな少年達を見据え、彼は歩き続ける。

何も言葉をかけようとはせず、立ち止まろうともせず。

ただただ、歩き続ける。

冷たい視線を少年に送りながら、大通りを抜ける。

そこは宿屋……ではなく、大きな荒地。周りには家なんて立派なものはなく、荒れ果てた木々や草花ばかり。

そこで彼は前進する足を止めた。

彼は行き先を宿屋から荒地へと変えていた。

放っておけば、間違いなく少年達は宿屋までついてくるであろう。

図書館に行くときにみた、路地裏に這い蹲る自分達と同じ状況の仲間のために。自分のために。

少年達はきつと、自分と同じ状況に陥^{おちい}った小さな子供や、老人を見捨てることはないだろう。

同じ状況に陥っているからこそ、少年達の中には守ってやりたいという動物特有の気持ちが現れる。

そんな少年達を見て。

今にも襲い掛かってきそうな、何かを成し遂げようとする少年達を見て。

「コイツ等のほうが全然人間らしいじゃねえか」

小さく呟いた。



ここから、水平線は見えない。
この町は海が近くにないのだ。あると言えはあるが、遠い。魔術師

とかがいれば簡単に行けるだろうが、あいにく今の時代この国に魔術師はほとんどいない。いたとしても『殲滅されるのが嫌だから。見つかりたくないから』なんていつて魔術を使わないだろう。

図書館で紅勇斗と再会してから、抗月瑠奈は彼の後をつけていた。

彼女はずっと特殊施設によって戦争があつたとき、前線で戦うために育てられた、戦うための国の所有物なのだ。そのうえいつも特殊施設では強さで一、二位を争っていたほどの実力の持ち主。

そんな彼女を、あの男はいともあつさりと撃退した。

もつとねばれば良い線いったのかもしれないが、彼女は引き下がった。

彼女の戦闘者としての本能が『こいつはヤバイ。早く逃げる』と告げていたのだ。

彼女としてもあつさりと引き下がってはプライドが傷つくだけなので、三発、帰り際に弾丸を御見舞いしてやった。しかしそんな彼女の弾をいとも簡単に剣で受けとめ、彼は顔色一つ変えずに余裕がましていた。

そんな彼に、瑠奈は興味を示した。

——あの男は一体、どれほど強いのだろうか。

そう、ただの好奇心。今頃子供のような好奇心が瑠奈の精神を支配して、彼女の体に勇斗を追うように命令したのだ。

本来なら後をつけているだけでは相手の力はわからない。

が、運よくこの町に受け入れられていない人物達が、ターゲット勇斗を獲物としたのだ。

これを機に、彼の力の強さを暴こうと、彼女は勇斗から目を放さな

い。

彼が無言で歩き、向かった先は宿屋ではなく、誰も寄り付かない荒地だった。

ここで奴等をぶちのめそうという寸法なのだろうか。

それは彼女にはわからない。

初めて勇斗がこの町にきて、それを見たときから、彼が何を考えているのかなんて分からなかった。

だったら、彼の行動を見届けるしかない。

彼女は声が微妙に、風下によって流れてくるぐらいの位置で身を潜めた。

彼は相変わらずの冷たい視線を少年達に送り、言った。

「どうせ俺の金目のもの目当てできたんだろ？特になにもねえし、渡すつもりもないが、かかってこいよ。相手してやる」

自身満々に彼は言い放った。

それを合図に、いつせいに周りの男達が襲い掛かる。

数、およそ二十人ほど。

ただガムシヤラに棒切れを振るう素人に、彼は俊敏に反応した。

意外と素人相手に上手く戦うのは難しい。

相手が素人だからこそ、型が決まっていなくて、どこに攻撃がくるのかがわからないのだ。

それに今の相手は今後の生命のかかっている、本気の男達が相手だ。どんな手を使っても勝とうとしてくるだろう。

殺す気でかかればどうってことないのだが、彼は殺す気はないらしい。

腰に携えてある剣を抜くことなく、彼はグローブをつけた手でその棒をなぎ払い、首元に手刀をいれたり、腹部に拳をぶついたり。

それは微塵の無駄もない戦闘スタイルに見えた。
あまた数多の戦闘を経験してきた彼女が武者震い、いや、身震いするほど。

男達と勇斗の戦いは、すぐに蹴りがついた。

全員生きている。それは彼が意図的に行った行為だろう。

彼は強い。

本当に、強いのだ――。

5 素性

けりがついたかと思うと、紅勇斗はその黒く澄んだ瞳で真直ぐ少年達を見据えた。

何を考えているのかは分からない。

彼が何を思っ^て、何を成^なそうとするのか。彼の強さの秘密はどこにあり、彼は何のために旅をするのか。たくさんの疑問が瑠奈の思考を駆け巡る。

今日図書館に彼が現れたときは驚いた。

絶対そんな細かいことはしないような人間に見えたからだ。

しかし彼は図書館にくなるなり真剣そうな表情で本を読みだした。ほとんど歴史関連だったが、彼とどんな関係があるのだろうか。

いつの間にか彼女は、紅勇斗という人物に強く惹かれていた。

それが好奇心からくるのか、興味本位なのか。いや、両方と言っても良いかもしれない。

しかし人間に興味を持ったのは本当に久しぶりのことだった。

彼女の育ったルシフェリア大国の施設では、興味を持つ時間なんてなかった。強くなければ生きていけなかったからだ。そのため興味どころか、友情を育^{はぐ}むことさえもままならない状態。

瑠奈は自分の薄紅色の長い髪を手に取り、その手に乗った髪の毛を見据える。

そして、小さく目を細めた。

髪の色。

今だ強く残るルシフェリア人としての証。

今ではこの薄紅色の髪色は、日本人にも少なからずいる。別にちよつと人数が少ないだけで、この髪の色が日本にいないわけではない。ギリギリのラインで隠していられる髪の色。

しかし瞳はそうはいかない。

ある程度経験をつんだ人間であれば、すぐに日本人かルシフェリア人かはわかってしまう。

だからこそ、黒ずんだ色のコンタクトをつねに使用しているのだが、そんな彼女の素性を勇斗はいとも簡単に見破った。

彼がどこまで瑠奈の素性についてわかるかは知らないが、これ以上自分の正体についてばれるわけにはいかない。

——彼とは、少し距離を置かなければ。

そう思った矢先、驚くことが起きた。

紅勇斗の周囲が一瞬、ほんの刹那の時間だけ明るくひかり、彼の攻撃によって倒れていた人物達の外傷が見る見るうちに治っていったのだ。

「な……っ」

ここで瑠奈は、うかつにも声をもらしてしまった。



「な……っ」

勇斗が治癒の魔術を使った瞬間、女の凜とした声が聞こえた。その声のほうを見ると薄紅色の髪の毛が、宙を舞う。

あの髪の毛の色で、勇斗を尾行できるのはこの町では抗月瑠奈くらいなものだろう。

ここから彼女の場所まではおよそ五十メートルくらい。丁度風下になっていて、彼女の気配に気づけなかったのだろう。

まさか自分が飢えた人間達に‘人間らしさ’を感じて、いつもなら必ず周囲を確認するのに、確認を忘れて魔術を使ってしまうことになるとは。

もう少年達には意識はなかったから、別に使っても大丈夫だと思った。

この荒地に足を運ぶ人間なんていないと決め付け、油断したのだ。

今更彼は自分の浅はかな行動に悔やみながら瑠奈と本気の殺し合いになることを覚悟して、彼女の後を追った。自分の‘魔術師’という素性を他の者にしらされないために。

『魔術師殲滅令』

それは魔術師を殲滅する、つまりは殺すという単純明快な命令。

しかし第四次世界大戦によって激滅した軍の人数では、ばらばらに暮らしている魔術師を全員殺すことは不可能に近かった。

そのため何を考えたのか、「魔術師を『魔術師殲滅令』により殺した人物は身分関係なく報酬を与える」と発表したのだ。

どうせ彼女も勇斗を殺しにくるだろう。

一人では敵わないとわかっていいるから、仲間を連れてくるとかする可能性は十分にありえる。

それか彼が魔術師だということをまわりに告知して、自分だけ安全なところに逃げるか。

どっちにしる自分が魔術師だと知られてしまった以上、彼女を生かしておくわけにはいかない。

口封じをしなければいけないと、彼は強く思った。

勇斗はすぐに瑠奈を見つけることができる。

必死に隠れているらしいが、彼女の薄紅色の髪の毛が遠くからでも目立っていて、居場所を教えてくれるのだ。

彼は注意深く腰から剣を抜き、抗月瑠奈というルシフェリア人の人間に忍び寄った。

6 戦い

紅勇斗は、魔術師。

それは今瑠奈が確認できたこと。

しかしそんなことはどうでも良かった。彼女が一番気になるのはもっと根本的なところ。

根本的な、なにかが気になるのだ。

彼女は注意深く後ろを確認すると、すでに勇斗は自分の背後にいて、剣を抜いていた。

そして、見たことのないような速さで彼は剣を振るう。

「ちょ……あんたは化物かつ！」

そんなことを叫びながら瑠奈は上へ飛んだ。

そして日が暮れ、時間と共にだんだん見えづらくなってきた視界を不幸に思う。

勇斗の部屋へ忍び込んだときは、彼よりも闇に目が慣れていると確信があった。

しかし今は違う。

あのとときすぐに形勢逆転され、しまいには放った弾丸を軽々と受け止められていたのだ。それほどの力の差があつて、なお彼に有利な状況に持ち込まれては、彼女の死は確実だ。

なんとかこの状況を打開しなければいけない。

彼女は上へ飛ぶと、だらりとのびきった、何年も手入れされていないような松の木に足をつく。

一瞬グラッと揺れたが、すぐに体勢を直し次の行動に移る。

—— ダアッ！

彼女は少し後ろを振り向くと、発砲した。

暗闇の中、勇斗は正確に弾の位置を見分け、剣で弾丸の中心を真つ二つに斬る。

「…………。いやいや。もうこの戦い私に勝ち目ないじゃない！ どうしてくれんのよ！」

「そう思っただったら死ねよ」

「いやよ！」

甲高い声を発しながら彼女は必死に攻撃をよける。

いや、実際にはよけきれていない。

全ての攻撃が彼女に当たっているのだ。深く斬られていないから痛みも少ないが、身体の所々から流血している。

それに対し勇斗は傷一つ負っていない。

先ほどから何回も発砲しているのに全て斬られる。

そしてまた彼女は傷を負う。

そんな繰り返しをしながら木々に飛び移り、足を進めていると――。

やがて彼女達は木々の生い茂る空間を抜けて、何もない、殺風景な広場のようなところへ出た。

地面はコンクリートでかためられていて、所々ヒビが入っている。たった、それだけの何もない空間。

夜空には数多の星が光り輝き、半月が彼女達二人を照らす。

はあ、はあ、はあ。

乱れた息を整えながら、なぜか止まった攻撃を不審に思い、紅勇斗という魔術師の方を向く。

すると彼は、悲しそうな瞳でこちらを見据えていた。

すぐく悲しそうな、何かに傷ついているように歪んだ顔。

「……………あ」

何かを言おうとして、瑠奈は口をつぐんだ。

なぜなら。

先ほどの悲しそうな表情が彼から消えうせていたからだ。

今は無表情。

いや、何かを楽しんでいるような顔。口元がにわかにつりあがり、

微笑している。

この戦闘を。

相手を殺すことを楽しんでいるかのような――。

彼は走り出した。

彼女の喉めがけて剣を突き出す。

その勢いは、人間の首なんて簡単に吹っ飛ばせられるほど。

この状況では瑠奈は絶体絶命だろう。しかし、彼女は動かなかった。真直ぐに紅勇斗を見つめ、少しも動かない。

それに、その勢いは彼女の喉元、あと数ミリのところで止まった。

「なぜ、避けない」

勇斗が、喉元に剣を突き立てるような姿勢を保ったまま、彼女に問うた。

それに彼女は微動だにせず、彼の瞳を見据える。

「きいてるのか？」

「……………ええ」

「なら早く答えろ」

「じゃあ逆に聞いわ。なぜ私を殺さないの？」

そのとき彼の瞳が揺れるのを、彼女は見逃さなかった。
それに追い討ちをかけるように彼女が言う。

「恐いんでしょう」

「……………」

「人を殺すことが恐いんでしょう」

「……………ちがう」

「人の‘存在’を消してしまうのがこわいんでしょう」

「…違う」

「違うわいね。さっきだって簡単に私を殺せたじゃない。なのに殺さなかった。私があんたの部屋に忍び込んだときも殺さなかった。あんたの命を狙ったあの少年達も。あんたは私が見たところ、相手を確実に殺せる力が備わっている。なのに人を殺さない。それは人を殺すのが恐いから。自分の手で人を殺め、その‘存在’を消してしまうことが恐いから」

「違う！…！」

彼は叫んだ。

今まで見たことのないような、弱々しい表情で。

何かに脅え、何かを恐れ、何かを否定しているその表情で。

別に人間恐いものがあっても良いじゃないか。

恐いものがない人間なんて気持ちが悪いだけだ。そんな人間いない。そう、彼女は思う。

。思つと同時に、彼女は目の前の、一人の人間を抱きしめていた――

6 戦い（後書き）

急展開…。

これ冒険でいいのだろうか？

ヒロインが仲間になれば冒険すると思います！

この話は次回へ続く！

7 真意

違う。

彼は、瑠奈の言う言葉を否定する。

彼女の言葉を、否定する。

しかしそれはとても弱々しい否定だった。

彼は、紅勇斗は否定ができない。

彼女が言うことは全て真実。だから、否定ができない。

が。認めたくもない。

自分が人を殺めるのをためらっている、
'存在'を消すことを恐れ
ているなんて。

恐れているだなんて、認めたくはない。

「違う!!」

勇斗は、今できる限りの大きな虚勢をはる。
すると彼女は優しい笑みを浮かべ。

「……………」

気がつけば勇斗は、彼女の腕の中にいた。

「別に恐くても良いじゃない。
人を殺すことに快感を覚える方が、より残酷に自分の‘存在’を否定することになるわ。

恐れて良いのよ。怖くていいのよ。魔術師だろうがなんだろうが、人間には変わりないわ。魔術師は『人間』と呼ばれることを嫌うけれど、私は魔術師も人間だと思うの。

だから、人を殺すことをためらっていいのよ。

私は、人の‘存在’を消すことを恐れ、ためらうあなたは素敵だと思う。

私だって殺したくない人がいたのに、殺さなければいけないときがたくさんあった。

でも、あんたは殺さなくてすんだのでしょう？

だったら良いじゃない。‘恐れ’は恥じゃない。むしろ喜ぶことだわ。きちんと人間の感情があるんだもの。

あんたの行動は自分が傷つくこともなく、相手も傷ついていない。

私はあんたを、優しい『人間』だと思う」

彼女は呟く。

優しく、ゆっくりと。

まるで寝付けない子供に子守唄を聞かせるように、ゆっくりと。

彼はそんな彼女の腕の中で思う。

人のあたたかさとは、こういうものなのかと。

物心つく前に母が亡くなってしまっていたし、魔術師のほとんどが彼を否定し、近づこうともしなかったから、女性の、父親以外の体温を己で感じたことがなかった。

きっと母がいれば、こんな感じなのだろうか。

彼女の言葉が頭の中で反映する。

恐れは恥じゃない。

恐れても良いのだと。

その言葉で、彼女のあたたかさで。

彼の心はほんの少し、少しだけ軽くなった。

あらわすならミクロ単位だが、それでも軽くなったことに変わりはない。

彼は優しく抱きしめてくれる瑠奈を見上げ、呟く。

「いつまでベタベタ触ってた、クソ女」

「へ？」

刹那。

彼の頑丈な拳が、グローブを間に彼女の腹を殴り飛ばした。
ズサアーっと大きな音をたてて、荒地を瑠奈の体が削る。

「ゲホッ……があ……」

痛みに歪んだ顔で、彼女はこちらを見上げ、殴られた腹部を両手で抱え込む。

その視線は

『なにすんのよ。せつかく私が慰めてあげていたのに！クソ女って
なによ！絶対に殺してやる！？ ×××を×××に×××してやる
んだから！』

とでも言うような、先ほどの彼女の言葉が全部嘘に聞こえるくらい汚らしい視線。

そんな酷い視線を横目に流し、彼は背を向ける。

「俺に説教かまそうなんざ150年早いんだよ。俺に惚れるか150年待て。そうしたらお前の説教3秒くらい聞いてやる」

なんて無謀な条件を突きつけ、彼はそのまま足を進める。
そして、何かを思い出したように彼は言った。

「俺、明日の早朝にこの街を出るから。俺の情報他の奴に漏らすなよ」

なんとという俺様っぷりだろうか。

彼が出て行ったらすかさず情報をばらまいてやろうか、なんて彼女は考える。

恨みや妬み、そして一番はうざいものを見るような視線で彼を見据えると、彼は背をむけ、歩きながら小さく呟いた。

「ありがとうな」

それは本当に、下手したら聞こえないんじゃないかというくらい小さな声。

しかしそんな消え入りそうな声を見事にキャッチした瑠奈は、

「良い根性してんじゃないっ」

心なしか、口元がゆるむのを感じた。



ベッドと机、イスしかない古びた、殺風景な部屋。
所々使われている木が腐り、窓は錆び付いている。
そんな部屋で紅勇斗は身支度を整える。

微妙に背丈の合っていない、茶色いコートをはおり、両手にグロー

ブをつける。そして腰に飛竜フイバーンの彫刻のされた細剣が携えられていることを確認し、窓の外を見た。

まだ陽はのぼり始め。

太陽の三分の一も出ていない頃。

辺りはまだ薄暗く、人が活動し始めるには早い時間。

そんな中、身支度を整えた勇斗は、これでもかと言うほど顔をしかめていた。

その歪みに歪んだ彼の目の前には。

「何でお前がいるんだ」

「？　なんでつて。もちろん目的のためよ」

そう、先日戦ったばかりの、抗月瑠奈がいたのだ。

しかもその瞳にはコンタクトはすでにつけられていて、薄紅色の髪を隠すように帽子をかぶっている。長いその髪は高く、一つにむすばれていて、少量しか彼女の髪は見えない。

見方しだいでは帽子をかぶったショートカットの女の子。上手く隠したものだ。

動きやすそうなスニーカーを履き、少し可愛らしい、その髪と瞳に合う淡いピンク色のラインの入った華奢なワンピースを着ている。その素材は軽く、動きやすいだろう。

彼女は小さく笑みをこぼし、

「さて、いきましようか！」

元氣よく彼に言った。

それに、さらに彼は顔を歪めて

「なんでお前が着いてくるんだよ」

「どうせ旅でしょう？ 私も目的が合って日本にきてるのよ。旅中は華やかな女の子がいて、話し相手にもなるし、お互いに目的が果たせる。一石三鳥じゃない？」

「……………別に。ってか、口やかましい女が増えたところで華やかさが増すとは思え……………」

が、そんな彼の皮肉を簡単に受け流し、

「ほら、早く！」

彼女は歩き出す。

そしてその彼女の手にはちゃっかり彼の金の入っている袋があつて。

「……………ああーもう！勝手にしろ！」

彼はイライラしながらも、この町を出た。

7 真意（後書き）

一応ここでブログ的なものが終わりになります。
お付き合いいただいたありがとうございます。
今後もお読みいただけると幸いです。

誤字、脱字などがありましたら気軽にお知らせ下さい。

8 時間と戦争

季節は春。

涼しい風が拭き、日差しもそこまで暑くない、過ごしやすい季節の、はずなのだが。

「……う」

「……あ」

何かを話そうとして、すぐにやめる二人の人物。

一人は黒髪黒目で、とりわけ整った顔立ちをしている男。微妙に背丈のあっていない茶色いコートをはおり、両手にグローブをはめている。腰には飛竜フイバーンの彫刻のされた細剣を携えており、その長いコートの中から時折、黒いパツツリしたタイプのランニングシャツと同じく黒い長ズボンが見える。顔中汗だけで、今にも倒れそうな表情をしている。

もう一人は薄紅色の髪に燃えるような赤い瞳、白くすけるような肌でとても整った、その実年齢よりも少し大人っぽく見える顔立ちの女。長い髪を頭のでっぺんで一つに束ね、瑠璃色の帽子をかぶっている。見方しだいでは長髪ではなく、ショートカットに見える。その薄紅色の髪に似合う、淡いピンク色の多少短めのワンピースを

着、ワンピースの左肩が少しずり下がっていて拳銃を左胸に装着していることをあらわしている。やはり彼女も汗がにじみ出していた。

炎天下。

今の彼らの状況を表すのなら、この言葉は必須だろう。

彼らの周囲を見ると、そこは砂漠のような風景。

辺りは家といえるものなどなく、戦争によってできた瓦礫の山と砂の地面。足元が砂で動きにくいうえに、太陽の光と温度は容赦なく彼らに降り注がれる。

ここ数日は人っ子一人見つけられない状態が続いている。まあ、戦争の被害にあつたうえ、何の配給も修繕もされなかったこの地域に帰ってこようという人間もそうだったもんじゃないが。

彼らの持つ水筒の中身も、残りわずか。

すでに彼らは話す気力も失せていた。

たまにふく生暖かい風に感謝しながら、無言で足を進める。

その光景は……、喧嘩中の夫婦のように。一度も彼らはお互いに目を合わせようとしない。ずっと自分の目の前数メートルを見据え、歩き続ける。

別に彼らが喧嘩をしているわけではない。

そもそも彼らには目を合わせるほどの余裕が残っていないからだ。

紅勇斗が旅立って、一番初めにたどりついた名も無き街。そこから抗月瑠奈をつれてまた旅立って今日で四日目。

最初の頃は嫌味を言ったりしつつも順調に足を運んでいた。その間に人の住まう町といえる町を発見できずに、野宿を三回した。それまではたまに川などを見つけて水を補給できていたし、魚もいた。林のようなところへ入れば木の実も少なからずあったので食料にも困らなかった。

のだが。

今歩いているところは川はおろか、草木も生えてすらない。

あるのは戦争によつて破壊された建物の瓦礫と、戦争によつて被害を受けた……

「これ、人の死体？」

「……………そのようだな」

……………人骨などだけだ。

瑠奈が呟いた死体と言ふ言葉は正しくないだろう。

すでに、彼らに見下ろされている者は、白骨と化している。よく見ると、その周辺にも骨らしきものが散らばっていて、骨一本が落ちているという状況もあった。

しかし。

死体というものは、こうも早く身が朽ち果てるのだろうか。身が滅び、白骨となるには少し早すぎる気もする。

まだ戦争が終わってから二ヶ月もたっていないというのに。

戦争が完璧に終了したのは 三千十八年 二月 十日。
今は四月に入つたばかりだ。

人骨が白骨化するためには、夏は一週間から10日程。冬では数ヶ月かかると思う。

その場所の地面の状況や、日当たりにも時間は変わるが。

今の時期、確かに炎天下とよべるほどの暑さだが、それは彼らが疲れているせいもある。夏ほど暑くはない。つい最近まで寒い冬が続いていたのだ、そこまで早く白骨化することは無いだろう。

それに、ここの瓦礫を見て、そこまで古くはないと思う。

瓦礫のクズはまだ真新しいし、瓦礫に埋まっている水道などは今だ湿っていた。

……… 水は出なかったが。

彼らは目の前に這い蹲る白骨を見据える。

瑠奈は何かを思い、何かを決心するような瞳で。

勇斗はどうとも思っていないような、冷たい瞳で。

そしてすぐに、歩き出すために踵を返す。彼らの向かう方向へ。

目的に向かって。

8 時間と戦争（後書き）

第二章の始まりでした。

セリフ（？）が四つしかありませんでしたが、次回からはきちんとやります↑

誤字、脱字、感想などがあればよろしくお願いします。

9 到着

あれから一晩。

彼らは猛烈なスピードで砂漠のような足元のおぼつかない道の歩み続けた。

その際に、たくさんの瓦礫の山に踏み込んで、水の確認と大雑把な状況詮索をする。もちろん詮索するのは目的が戦争に絡まっている勇斗だけで、瑠奈は水の確認を終えると瓦礫の下の日陰で一休み。

実際、確認をしても水が出てきたためしがないので夢現の状態で確認を済ませる。

彼らの水筒の中身は、空。

のむことをためらうのはいいが、飲まず食わずでは先にくたばってしまう。

一晩歩いたというのに、一向に景色が変わらない。
辺りに散らばる瓦礫の山と白骨。そして地面に敷かれる永遠的な砂。
この砂が余計に体力を吸い取る。

彼らの体力、というよりも瑠奈の体力が限界に達した。

……ザシュ。

小さな音を立てて瑠奈の体は砂に倒れた。

その音を聞き、勇斗は振り返る。
そして

「……おいおい。——な？」

と、かなり言葉を削り、瑠奈に投げかける。
それに彼女は

「いや。なにいつてるかわかんないから……」

所々消え入りそうな声で、突っ込みを入れる。
それよりも。それよりも、だ！

彼女は思う。

勇斗は魔術師なのだから、合理的な魔術を使えばこんな状況にならずにすんだのではないか。

もし瞬間移動的なことが無理だとしても、水を出すくらいできたのではないか。

ついでに、何で勇斗^{コイツ}は疲れていないのか、と！

この砂漠地帯のようなところに入っただばかりのときは、ものすごく暑がっていた。

多少疲れもあったようで言葉もろくに発さなかったし、視線も合わせなかった。

が。少し睡眠をとったらどうだ。

ものすごく元気になっていううえに、こちらを『……おいおい。もうダウンか？そんなんじゃない俺と旅なんてできないぞ。おいていくかな？』みたいな事を約しながら言う。それに彼女が倒れたことに

対して嬉しそうにこちらを見つめてくるこの男がとてつもなくウザい。ついでに嫌味っ面なのに整っていると云わざるをえないこの綺麗な顔が無性にイラつく。

しかし彼女にはもう、それをいい返せる力が残っていなかった。砂に顔を半分埋め、視線だけで勇斗を見据える。

そして、彼の言葉にムカついた瑠奈は、なんとか起き上がろうと力を振り絞り、半分立ち上がる。

だが。

——ガッッ

勇斗の手刀が見事に瑠奈の首筋に入る。
同時に彼女はよける体勢をつくったのだが、頭の回転に体がついていかず、またその場に倒れ伏した。

「……………さすがっ」

彼は小さく呟く。

この状況で、一応仲間となった相手に攻撃を入れられるとは誰も思わないだろう。

なのに彼女は急にきた手刀に俊敏に反応した。まあ、回避まで持つていくことには無理があつたが。

彼はじーっと瑠奈を見つめる。

倒れた拍子に落ちた瑠璃色の帽子。

そしてその中に収まっていた薄紅色の長い髪。煌らかな容姿。彼は数秒見つめた後に

「ああーくそつ。面倒くせえ」

そんなことを言いながら、その細身な体を引き寄せ、背中に乗せる。そして、彼は果てのなさそうな砂漠を歩き出した。

▼▼▼

わいわいわいわいと、たくさんの人の声が聞こえる。

心なしか体は揺れて、頭に血が上っているのがわかる。
そして、腹が急激に痛い。

瑠奈はパチっと、それこそ音が聞こえてきそうなくらいの勢いで目を覚ました。

間の前には、地面。

土で固められた地面と、ブラブラしている自分の腕と髪。
腹が何かに押されているような感覚があり、……心なしか尻が触られている。

バアッと上を見えるとそこには紅勇斗の横顔があり、周りの人は自分を凝視していた。哀れみの目で。
即座に理解した。

自分が勇斗に俵担ぎされていることを！

「~~~~~！放せっっ！？」

彼女は声にならない声で奇声を発し、空中に浮いていた右足で勇斗に回し蹴りを入れる。が、それを予期していたかのような俊敏な動きで止められ、彼女は地面に落とされた。

「いつ……」

彼女はしりもちをつき、腰を左手でおさえる。

なにすんのよ！ というような目で勇斗を見ると、彼は面倒くさそうに

「倒れた体力なしのどこぞのお嬢さんを運んでやったんだよ」

答えた。

「それはあんたが体力ありすぎなだけつ。……ふうー。とりあえず、運んでくれたことには感謝するわ。ありがとう。でも！」

彼女は反論しようとして、深呼吸する。
そして続けた。

「もうちょつとましな運び方はなかったの！？　なんで俵担ぎ！？」
「……さて、と。宿はすぐそこだ。せっかく集落のあるところへたどりついたんだ。さっさと行くぞ」

華麗に無視された。

彼女はそれに、はあーと肩をすくめ、周囲をよく見渡す。

人は皆頭に布をかぶりながら移動している。土で固められた地面に、テントのようなもので作られた店。そこには数少ないが水や食べ物、

衣類などが種類別の店で売られていて、一種の商店街のような町だった。

彼女と勇斗がであった町ような、金持ちとそうでないものの差は激しくなく、皆同じような服装で歩いている。

彼女は周囲を大雑把に確認した後、勇斗の方を見る。

茶色いコートが風でなびく、その大きな背中を。

ずっと俵担ぎであの永遠的な砂漠のよな所を抜けるのは容易ではなかっただろう。途中で俵担ぎに変えたはずだ。

見捨てるといっておきながらここまでつれてきてくれたのだ。

彼女は小さく笑みを漏らし、彼のほうへ走っていった。

10 ナンパ

「で。これからどこ行く気なの？」

スタスタと歩く勇斗に、瑠奈は問う。

先ほど着いた村のようなこの集落。特に金持ちなどはいなさそうで、皆似たり寄ったりな服装をしていることからして、国からはほとんど見離された状態の人たちだろう。

しかし、それでもきちんと生活できているのだから、この集落の人たちはすごいと思う。

瑠奈は勇斗から渡された瑠璃色の帽子を深くかぶり、彼を見上げる。彼が一点を見つめているので、どれかと瑠奈も彼の視線を追った。

するとそこは、小さな宿屋。

「今日の滞在場所？」

「それも、ある」

「？」

他に何があるのだろうか。

彼はそのまま小さくてボロボロな宿屋に足を踏み入れ、カウンターにいる白髪の生えた爺さんのところへ足を進めた。

年齢と共に老いているのか顔はとてもシワだらけで、目元は垂れ下

がり、優しそうな人に見える。

爺さんは勇斗の顔を見るなり客と確認したようで、すぐに話しに持ち込んだ。

「何名様だい？」

「二人」

「滞在期間…は」

「三日」

「6万と4千円だよ。うちは先払いだ」

彼が金を支払った後部屋に行こうとすると、勇斗の耳元で何かをささやく。

…何をささやいたかはわからないが、勇斗の顔が一瞬引きつったのがわかった。

そのまま勇斗は部屋へ行き、その後ろに瑠奈も続く。

滞在する部屋は、とてつもなく汚かった。

所々木の板が折れていて突き出し、窓はない。電球も小さいものが一つで夜は資料などを目にするのは難しいだろう。埃もかなりかぶっていて、扉を開けた瞬間埃が宙を舞う。

「ゴホッ…そ、掃除くらいしろっての」

瑠奈がむせながら文句を言つと、勇斗は

「まあ、こんなもんか」

と、呟いた。

その後荷物を適当にベッドの上に置き、窓を全開にして埃を払う。砂漠の近くだから、窓から入る風には砂も一緒に入ってきた。しかしその風のおかげでなんとか埃は薄くなり、三日程滞在するのであれば特に害のないほどのものとなった。

それを確認すると彼はまた荷物を持ち、スタスタと一階に降りてしまった。

それに瑠奈はすこしムっとしながら着いていく。

彼はいつだって自己中心的に、己の目的のために行動する。

魔術師というだけでも殺されるかもしれないという不安を感じているはずなのに、そのうえ魔術師に関係のあるような目的を果すため、自ら行動を起こしているのだ。

この国の首相が彼の存在を認知したら、戦争で疲れている軍隊を動かす、彼を殺しにかかるだろう。

瑠奈の目的は日本兵軍隊の壊滅。

国の政治を内部から崩壊させ、首相等の首を打つ。

それが彼女に下された最後の任務。特殊施設で育ち、戦闘人形として扱われてきた、人を傷つけることしかできなかった彼女の、最後の汚れ。

これさえこなしてしまえば、後は彼女は自由なのだ。ここで汚れば、あとは汚れなくてすむ。

誰も傷つかず、自分も傷つかずすむのだ。

おそらく瑠奈と勇斗の目的は似たり寄ったりだろうと、彼女は思う。彼女は目の前で美人な女性をたらしこんでいる勇斗に目を向け――

「――つて、なに口説いてんのよっ!？」

彼は口説いていた。

金髪碧眼の、スタイル抜群な女性を。

目元は若干つりあがっていて強気そうな印象を受けるが、それ以上に抜群のプロポーションで妖艶さが増している。彼はこんな大人っぽい女性が好きなのだろうか。

「なあ、姉ちゃん。俺さあんとみたいな人結構好みなんだよね。ちよっと茶でもどう?」

好きなんだなあー。

彼女はなぜかイラだつ感情をおさえ、勇斗を軽蔑するような目で見据えた。

ナンパの上等文句を、彼はいつもは見せない爽やかな笑みで発する。瑠奈からすれば認めたくはないだろうが、彼はそれなりに整った顔立ちをしている。

絶世の美形ではないが、それなりの顔。上の中くらいの顔立ちだ。

そのうえ性格を隠し、爽やかな笑み全開で口説けば大抵の女性は堕ちるだろう。

「……そうね、いいわよ?」

堕ちた。

それに勇斗は笑みを浮かべる。

先ほどの爽やかな笑みではなく、嫌味つたらしい、何かを考えているような笑み。

それに少し変だな、と思いながら彼女は勇斗の法を見ていた。

すると彼は瑠奈の近くに歩いていき、耳元で何かをささやく。

それに瑠奈はニヤリと笑って、勇斗にいった。

「了解。あとでなにか奢んなさいよ」

「宿代は俺なんだ。それで我慢しろ」

「ケチ」

「なんとも言え」

二人はそんな会話をしてから、瑠奈は宿を出て、勇斗も金髪の女性を連れながら宿をでた。

二人は別々に行動し、勇斗たちは少し汚いが、他に比べるとずいぶんマシな店へと足を踏み入れていた。

10 ナンパ（後書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。

11 企み

瑠奈と勇斗が分かれた後、勇斗は金髪碧眼の女性、花蓮^{カレン}をつれて、小さな喫茶店に足を踏み入れていた。

中はボロボロで、年相応の男女がデートに使うにはあまりにも不釣合いな場所だったが、二人とも文句のひとつも言わずに、丸いテーブルを中心に囲むように置いてあるイスに腰掛けた。

勇斗はこれまでにみせたことのない爽やかな——なにかを企んでいそうな——笑みで花蓮を見つめた。

それに花蓮も笑顔で答える。

その美しい金髪に似合う、ひどく妖艶な笑みでニツコリと。まるで相手の不倫に腹を立てているがなんとか押さえ、笑みを作っているかのような。

彼らの周囲には、目には見えない、なにか黒いものが渦を巻いていた。



その頃、瑠奈はというと。

「あ、お爺さん、少し良いですか？」

先ほど金髪美女、花蓮をつれて出て行った勇斗と対照的に、一度出てもう一度宿に入った瑠奈。

帽子を深くかぶり、コンタクトをお手洗いでつけた後、受付の白髪爺さんのところへといっていた。

そして受付部屋に誰もいないことを確認すると、問う。

「ここら辺で、魔術師達の集まりってない？」

その瑠奈の突拍子もない言葉に一瞬、ほんの一瞬だけ表情を変えた老人。

しかしすぐに普段の表情へと戻り、知らんなあ、と答えた。

魔術師。

それは日本において、絶滅しかけている少し特殊な人間、だと瑠奈は思っている。

少し奇妙な術が使えるだけの、感情のある人間。

それは、勇斗とであって変わった瑠奈の思考。

最初は違った。

自分達とは違う、へんな術を使える奇妙な生き物。

それが魔術師に対する瑠奈の意思だった。

『奇妙な生き物』たちが、勝利を確信していたルシフェリア大国と負けるであろうと思われていた日本を、引き分けという状況に陥らせたのだ。

それと同時に瑠奈には指令が来た。

瑠奈は自分の最後の指令のことを思いながら、もう一度問う。

「魔術師の集まりは、何処？」

いや。今度は脅し。

殺気を含ませ、教えないと死ぬぞという雰囲気を出す。

それに一瞬爺さんは怖気づき、すぐに目を合わせてきた。

普通ならばビビッているはずだろうに。

爺さんはすぐに感情を制御し、何かを言おうとこちらの目を見てきたのだ。

一般人にそれができるはずがない。

もしできるとすれば、よほど鈍く、人間の自然な感情がわからない、という人物くらいだろう。

しかしそう鈍感な人間ではないようだ。

現に一瞬怖気づいているのだから。

「……姉さん、ただもんじゃないな」

「？ まあ、一般人ではないわね」

「何のために魔術師を捜し求める」

老人の舌足らずな言葉とは思えないほど、爺さんはハッキリとそう問うた。

それに瑠奈は――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2284v/>

魔術師の機密

2011年10月2日20時14分発行